

実は私、

中大出身で

Vol.4

山本貴史氏

1985年
経済学部
卒

理研イノベーション代表取締役社長
東京大学エクステンション代表取締役社長
東京大学TLO前代表取締役社長



インタビュー動画は
こちらから
ご覧になれます

「中大一厳しい」ゼミで研鑽を積む
産学連携「**技術移転**」の道へ
導いてくれた**恩師**と**中央大学**



「実は私、中大出身で」の第4回では、アカデミア（学術界における研究職）の発明や知的財産を、産業界に「技術移転」として橋渡しをするパイオニアとして、長年活躍している株式会社理研イノベーション（埼玉県和光市）の代表取締役社長、山本貴史氏（1985年経済学部卒）に、学生時代の学びや、技術移転の進展が社会に及ぼす影響、価値などについて話を伺った。山本氏は「明日の社会、地球のためにこそ、新たな技術移転の余地がある。世界はもっと発展できる」と未来を展望し、「技術移転の道に進むきっかけを与えてくれたのが大学の恩師であり、中央大学だった」と振り返っている。

（聞き手「HAKUMON Chuo」学生記者、金岡千聖^{ちさと}＝商学部4年、荒田智海＝文学部3年）
（映像撮影 中央大学広報室・中央大学放送研究会学生スタッフ）

故郷を離れ、「外の世界を見たい」 斎藤優ゼミで実践的な学び

《岡山県新見市^{にいみ}出身の山本氏は、小学校と幼稚園で教育に携わっていた両親のもと、たくましく活発に育った。ただ、高校卒業時には、故郷を離れて「外の世界を見たい」と、県外の大学を受験する。胸に抱えた閉塞感を払いたかったからだという。中央大学経済学部産業経済学科（現経済情報システム学科）に進学し、技術移転や国際経済などについて学修する斎藤優^{まさる}教授（現名誉教授）のゼミの門をたたく。研鑽を積む中で、卒業後の社会人としての方向性が培われていった》

——岡山県から東京の大学へ、中でも中央大学に進学しようと考えた理由を教えてください。幼少期はどのようなお子さんでしたか

山本貴史氏 故郷は隣の家まで1キロという田舎です。父親は小学校の校長で、母親は幼稚園の園長でした。このまま新見にいますと、おそらく学校の先生になって、ここから抜け出せなくなるのではないかと。閉塞感というか、「外の世界を見たい」という思いが強かったんですね。ですから、岡山以外の大学に進みたいと希望して、中央大学を受験して合格できたというのが実際のところ。小さい頃はもう、とにかく野生児ですよ。野を走り、山を駆け上り、当時は川でも泳げた。ただただ野生児のように元気に走り回っていました。

——多摩キャンパスで学んだ記憶、学生時代の印象的な出来事を教えてください

山本氏 経済学部で斎藤優先生は「技術移転論」という著書があり、先生のゼミは中大でも「一番厳しい」と評判でした。卒業論文の出来次第では、ほかの科目の単位が十分であっても卒業できない。それでも希望して、試験と面接を受けてゼミに入り、勉強に一生懸命に取り組んで、さまざまなことを学びました。「きょうの1ドルは何円？」の問いに答えられなかったら、教室から出ていきなさいという厳しさで、卒業前の最後の講義でもゼミ生同士で円ドル相場を確認し合ったほどです。実際は優しい先生で、厳しいばかりではなかったんですけれどね（笑）。

ゼミでは本を読むだけ、先生の話聞くだけという勉強ではなく、いろいろな学者が本で語っているようなことを、校外に出て確かめるといった調査をして、とても実践的な学びを経験しました。労働賃金が安い国に仕事（生産拠点）が移っていくときに起きる開発経済的な技術移転と、一方では、ソニーやパナソニック、トヨタ自動車といった日本企業が世界に進出するとき、現地でモノを作れるようにするための技術移転。この2つの実情を調べられる国として、スリランカに2週間滞在したこともありました。当時、スリランカ国内は紛争状態で、身の危険を感じるような体験もしました。帰国後、国際協力機構（JICA）の雑誌に「学生が見た戦争と平和」として記事が紹介され、原稿料をいただいたというのも思い出です。それと、慶應義塾大や東京工業大（現東京科学大）、一橋大などの学生同士で技術移転や国際経済について議論するディベート大会で、私たちのゼミは負けたことはありませんでした。「そんなことを言うけれど、スリランカでは今こんなことが起きています。どう説明できますか？」というふうに、「スリランカ一本」で攻めたこともありました（笑）。

アントレプレナー教育の先駆け 「自分の足で立て」「社長になれ」の教え

——斎藤先生のゼミでの学びが大変充実していたんですね



JICAスリランカ事務所の所長宅を訪れた斎藤ゼミのメンバー。前列右から2人目が斎藤教授、すぐ左後ろのチェック柄のシャツが山本氏



山本氏 ゼミで学んだ技術移転は、言葉は同じですが、私が今取り組んでいる技術移転とは違います。当時の経験自体がそのまま今に役立っているというわけではありませんが、3年生の頃、こんなふうに取り組んで、学びを深めたことがありました。ゼミでは「100論」といって、ゼミ生は論文100枚（400字詰め）を書きます。私は証券と銀行の垣根（業際）の変化に関心があったので、アポイントを取って、まずA証券で話を聞きました。次にB銀行で「証券の人はこんな話をしていました」と尋ねると、「証券はわかってないなあ」と異なる説明を受けた。続けてC証券で「A証券の人はこんなことを言って、B銀行の人はこう教えてくれました」と水を向けると、「AもBもわかってないなあ」と…（笑）。でも、こうしていろいろな人の意見を聞くと、頭の中が立体的になって、やっと自分らしさ、自分の考えができてくる。それに外国の垣根の実態を加えて100枚を書き上げました。斎藤先生は愛情のある厳しさを持った先生で、口癖は「やってみい（やってみなさい）」でした。当時、アントレプレナー（起業家）という言葉は浸透してなくて、私が社会人になった1985年に「アントレプレヌール」というフランス語読みの本がはやるんですけど、今考えると、斎藤先生はアントレプレナー教育を実践されていたんです。大企業に就職すると叱られました（笑）。「サラリーマンで一生を終わるなんて考えるな。自分で会社を作れ。僕ら（先生たち）の時代は就職先も住む所も選べなかったけれど、君らは何でも選べる。住む国も、仕事も選べるんだから、自分の足で立たんでどうする！」というのが先

生の教えでした。それを実感したのが、教授を退職されたときの最終講義です。卒業生の先輩や私たちが大勢集まりましたが、顔ぶれに社長のなんと多かったことか。卒業生の多くが社長というゼミになっています。

——そうした学びを経て、どのように将来の進路を見据えていたのでしょうか

山本氏 斎藤先生の影響が大きかったんですけど、いつか自分でビジネスをやりたい、自分で事業をしたいという思いはありました。投資やお金の勉強ができるだろうと、就職先として最初は証券会社しか興味がなかったんですが、私はやはり事業をやりたいかったです。お金の勉強も大事ですけど、事業をやるなら事業を勉強した方がいい。学生の立場では全くわからない業界や、わからない仕事が多くあるわけですね。それで、さまざまな事業を見ることができリクルートに興味がありました。

《中大を卒業後、「35歳で起業を」というベンチャー志向を持ち、「さまざまな事業の現場を見て勉強したい」と希望して、リクルートに入社した。そして、「学生（人）と企業のマッチング」である就職、転職に関する仕事に携わったとき、あるアイデアを思い立つ。「大学教員の転職は斡旋できないかもしれないが、教員の頭にあるナレッジ（知見や技術）はトランスファー（移転）できる。産学連携の推進に役立つのではないか」——「技術と企業のマッチング」への発想の転換である。「アカデミアの発明、知的財産を評価し、ライセンスやスタートアップを通じて事業化へと結びつけて、研究成果を社会に最大限に還元する」。1996年、それをリクルートの新規事業として日本で最初に手がけるようになる》

——「産学連携」や、大学の研究成果の社会への還元に、最初に着目したきっかけや経緯を教えてください

山本氏 私自身もこうした仕事をするとは想像していませんでした。ゼミ仲間や後輩にも「まさか技術移転のビジネスを手がけるとは思わなかった」と驚かれました。いろいろな事業を勉強したかったので、営業職だけを希望しましたが、のちにリクルートブック（現在のリクナビの前身）を担当した課長職のとき、新規事業を考えてほしいと上司から相談されたんです。リクルートは、さまざまな会社がこんな職種で学生を募集しているという情報を提供して、学生の自由な就職活動を支援し、企業側は将来、何かを生み出すポテンシャルのある学生を採用する。この仕事は学生と企業のマッチングです。ところで、本来は大学の先生方も企業に転職してもいいと思うのですが、おそらく研究をしたくて教員になられているから転職しない。でも、転職は斡旋できないけれど、頭の中のナレッジはトランスファーできるかもしれない。教授の頭に新しい知見と技術があって産業界にトランスファーできたら、産学連携が進



リクルートの若手社員だった頃

むのではないかと。「これはすごいことを思いついた」とハッとしましたのですが、調べると、アメリカでは1920年代からそうした考えや技術移転機関がありました。それでも、特許や知的財産を産業界に移転する事業の日本での先駆けとして、リクルートの新規事業として始めたのです。

どう結び付ければビジネスになるのか 「技術移転の父」に本質を学ぶ

技術移転のスキルやノウハウは、アメリカのスタンフォード大学に技術移転機関、OTL (Office of Technology Licensing) を創設し、産学連携に成功したニルス・ライマース氏に、会社（リクルート）として契約した上で学びました。大学のいるシリコンバレーにはハイテク・IT企業が集まり、夕方になると競合や異業種などに関係なく、皆でビールを飲んだりして、わいわいやっているうちにネットワークや会社ができるといった流れがあって、いま93歳（2026年5月現在）のライマース氏はその輪の中心にいたような人物です。どんなにAIが発達しても新しい事業をやるかやらないかを決めるのは人で、そのアイデアを創るのも人です。発明者である研究者と事業家を上手につないでいくというのがライマース氏の産学連携のモデルでした。私は経済学部出身ですから、技術系のバックグラウンドもなく、技術の専門知識や専門用語を知らない携われない仕事であれば、手がけられなかったでしょう。ライマース氏の手法をみていると、一番大事なのはマーケティングでした。技術をどういう形にすれば、事業になるのか、ビジネスになるのかということを熟慮して結びつけるというのが技術移転の本質で、一番に学んだところ。「技術移転の父」といわれるライ



「技術移転」の恩師であるニルス・ライマース氏と(2017年10月)

マース氏は Google がよちよち歩きだった頃から、創業者のラリー・ページ氏やセルゲイ・ブリン氏を支援していた人で、自分のことを「テクノロジージャンキー」とたえていました。東京に招いたときは「青色レーザーを見たい。徳島って遠いか？」と聞かれました。徳島県の企業に在籍していた中村修二氏が高輝度青色発光ダイオードの発明・実用化でノーベル物理学賞を受賞(2014年)する随分前のことです。研究について日本では誰も知らないような時でしたが、すでに興味を持たれていましたね。

《産学連携、技術移転の仕事が軌道に乗り始め、2000年には先端科学技術インキュベーションセンター(東京大学TLOの前身)の社長に招かれる。2023年まで社長を務め、ニルス・ライマース氏のマーケティングをモデルとして、数々の産業界への技術移転に携わっていく。技術移転によって社会に役立つ製品や仕組みを誕生させる、その実例を尋ねた》

——これまで携わったアカデミアの研究成果で技術移転されたものを教えてください

山本氏 駅のコンコースとして大きな橋を造り、その両側に改札口がある構造としたら、人の流れがどう変わるかについて、横浜国立大学工学部の森下信先生(現名誉教授)が開発した特殊なシミュレーション技術を用いて予測し、特許

株式会社東京大学 TLO

1998年設立。経営理念は「産業界との連携による東大の知の社会への還元」。TLOは技術移転機関(Technology Licensing Organization)の略。前身の先端科学技術インキュベーションセンターを含め、山本氏は2000～2023年に代表取締役社長を務めた。

出願をして、今ではJR 東日本の品川駅、田町駅など数多くの駅で採用されています。この頃、東京大学から声をかけていただき、先端科学技術インキュベーションセンター(現東京大学TLO)に移りました。東京大学TLOにおける実例としては、コマツのショベルカーやフォークリフトといった建設機械に、東京大学生産技術研究所の鹿園直毅教授の技術開発による排気ガスと騒音規制に対応したラジエーター(熱交換器)が搭載されています。鹿園先生は金属への熱の伝わり方の研究などが専門です。ラジエーターはエンジンを冷やして熱せられた水を冷却する役割がありますが、ラジエーターの形状を全然違うものに変えると熱伝導率が変わり、排気ガスも騒音も減って燃費まで改善されたんです。先生は燃費が良くなることまでは予想外だったようですが、この技術の発表会では、「ラジエーターにイノベーションの余地があったとは…」と誰もが驚いたそうです。

東京都板橋区にあるワカイダ・エンジニアリングという会社と、東京大学アイソトープ総合センターの共同研究では、

放射性物質を安全に回収できるフィルターの開発に成功しました。ワカイダ・エンジニアリングは従業員12人（当時）という小規模な会社でしたが、開発されたのは放射性物質を99%以上除去できるという布状のフィルターで、東日本大震災で爆発事故が起きた福島原子力発電所に陸上自衛隊を介して納入されています。実はワカイダ・エンジニアリングの社長は、この技術を用いたマスクを作りたかったんです。微粒子のPM2.5なども吸着できることがわかりましたが、マスクメーカーはどれも商品化に応じてくれなかった。そこで私たちが、社長と通販大手のフェリシモ社長の間を仲立ちしたところ、「ちょっとお高いけれど、おしゃれなマスク」という形で売り出すことができました。このように事業化のためには、小規模な会社ではできないこともありますから、私たちのマーケティングは、ほかの業界の会社を巻き込んで製品化していくといった取り組みも行っています。

《技術移転を成功に導くカギは、「チームビルディング」というプログラムにあるという。多くのベンチャー企業が、技術ではなくチームワークのもろさから成功にたどり着けなかった例を見てきた山本氏は、チーム（組織）の力を最大限に引き出すため、チーム内のコミュニケーションをエンジニアリングする（役に立つ実用的なもの、システムとする）ことの大切さを説いている》

成功のカギはチームビルディング 「コミュニケーションをエンジニアリングする」

——以前の講演では、技術移転の成功のカギとして、「チームビルディング」の重要性を指摘されていました

山本氏 チームビルディングは、働くすべての人がしっかりと考えるべきことだと思っています。「人はなぜ働くのか」を調査するリクルートのシンクタンクで学んだモデルをもとに、リクルートの許可を得て改良したのが私のチームビルディング・プログラムとなります。会社では、社長や専務、常務、部長も課長も新入社員も「会社を良くしたい」と思っていますよね。でも夜の酒場に行くと、「部長の考えはだめだ」「課長もだめだ」と、とぐろを巻いている人を見かける。皆が良くしたいと考えているのに、どうしてだろう。そこで「コミュニケーションをエンジニアリングする」というリクルートの横山清和さんという人が考えた方法を取り入れるんです。横山さんは、企業内のコミュニケーションをエンジニアリングすることで企業を活性化させる理論を打ち立てた人です。たとえばコンビニチェーンの社長が「本格的な競合対策をやるぞ」と社内に呼びかけて、1カ月後の会議で、ライバルチェーンの店舗出店ペース、出店数、売り上げ上位100店舗や売れ筋商品の最近10年の移り変わりなど、社員が一生懸命に調べたリポートに対して、「こういうことじゃないんだ」と怒ったら、社員たちは夜の酒場で



「社長はだめだ」となりますよね。でも、もしかすると、社長は10年後のビジネスの競合を頭に描いていたのかもしれないし、競合相手は同業者ではなく、宅配業者や通販業者になることを念頭に置いていたかもしれない。そのような観点で競合対策を指示したとすると、どうすればよかったのか。つまり、一人ひとりが見えている世界の広さ（視野、視点）と、現在から未来へと続く時間軸をできる限り、重ね合わせる努力をしていけば、コミュニケーションはもう少しエンジニアリングされるよねということです。友達同士や夫婦、親子でもそうかもしれません。互いに大切に思い合っているはずなのに、いつの間にか、けんかになっていることがあるけれど、それはとても、もったいない状況なわけです。

チームビルディングの本質はそこにあるんです。ベンチャーキャピタル（ベンチャー企業への投資会社・ファンド）は、「あなたはCEO（最高経営責任者）、あなたはCFO（最高財務責任者）、あなたはCTO（最高技術責任者）」のように決めていくことをチームビルディングといいます。これは採用とポジショニングしか決めていないわけですよね。野球はどのチームにもそれぞれのポジションの選手がいるけれど、チームによってカラーは違うでしょう。そこで、私たちは「ベクトル（方向）を合わせる」と簡単に言うけれど、その方向性や、なぜ合わせる必要があるのかを含めてコミュニケーションをエンジニアリングする必要があるんです。だとすると、それぞれの人のモチベーションのリソース（源泉）や意思決定の基準も互いに理解していかないとはいけません。何回も酒を飲みについて、「彼は、彼女はこういう人なんだ」とわかるのが昔の日本流だったのですが、酒を飲まなくても大切な仲間のリソースを言語化できるというのがチームビルディングです。どのような会社も組織も、作った瞬間から問題は生まれます。カリスマ経営者が「こっちだ」と言ってもうまく切り抜けられることもあります。多くの場合それは結果論であって、しかも皆がカリスマ経営者になれるわけではない。一人ひとりがどういうふう考えて



問題に対処すべきかを、同じフォーマットで考えられるようにするのがこのプログラムです。

《 現在、理研イノベーション代表取締役社長を務める一方で、東京大学エクステンション代表取締役社長として、東大の学術成果を社会人や企業にリカレント教育（学び直し）として還元する仕事にも携わる。18歳での受験結果がひとときわ重視される世の中を「超学歴社会」とたとえ、社会人の学ぶ姿勢と実際の学びを重視する「学習歴社会」への変革を訴えている 》

理研の研究成果「いかに社会実装するか」 リカレント教育の充実で「学習歴社会」へ

——理研イノベーションの取り組みについて教えてください

山本氏 理化学研究所（理研）は一万円札に描かれている渋沢栄一氏が発起人となった理学、化学を研究する研究所で、次のような歴史があります。シリコンバレーよりはるか

株式会社理研イノベーション

理化学研究所の研究成果を社会実装する可能性を追求し、産業界に働きかけて事業化を推進する組織。理化学研究所の100%出資で2019年に設立された。

東京大学エクステンション株式会社

東京大学の学術成果を社会人や企業に教育（リカレント教育）として還元する東大100%出資の組織。2018年設立。

昔、大正時代から昭和の初期に「理研コンツェルン」という理研の研究成果を事業化、製品化する企業集団がありました。理研は当時、東京の本駒込にあって、数多くのベンチャーやスタートアップ（理研ホームページによると最盛期の1939年に63社・121工場）が周辺に生まれました。研究グループをスピンアウト（子会社や部署の切り離し・独立）させていたんです。当時はベンチャーという言葉はなかったけれど、研究のシーズ（ノウハウやアイデア、特許）に基

づき、それぞれに会社を作っていました。そのまま進めば、シリコンバレーは本駒込がモデルとなったかもしれません。残念ながら、第二次世界大戦でこれは全部失われてしまうんだけど…。ただ、理研は今でも、たとえばインパクト論文（影響力の高い学術誌に掲載された論文）の数が東京大、京都大に次ぎ3番目です。国立研究開発法人の自然科学系ではもっともユニークな研究をしていて、これからスーパーコンピューター「富岳NEXT」の開発にも着手します。時価総額世界一というアメリカの半導体開発・販売の「エヌビディア」のチップを使って、従来の富岳より大幅に性能を向上させた次世代のスーパーコンピューターです。物質のミクロの構造や動きを世界最高精度で透視、観察できる性能を持つ大型放射光施設「SPring-8」（兵庫県佐用町）など、大学にはないような大型の装置もありますし、「SPring-8-II」も着工します。

私たち理研イノベーションのミッションは、理研の研究成果をいかに世に出していくかということに尽きます。ところで、中東情勢の悪化に伴う現在のホルムズ海峡の封鎖で、原油や液化天然ガス（LNG）以外にヘリウムも日本に入っていない状況です。ヘリウムはリニアモーターカーを走らせるのにも必要な不燃性のガスで、そもそも需要に供給が追いつかず世界的に不足している希少資源です。理研は、使用済みのMRI（磁気共鳴画像）装置からヘリウムを回収し、再び精製・液化するリサイクル事業も始めていて、こうしたことにもしっかりと取り組んでいきたいと考えています。

——東京大学エクステンションのリカレント教育はどのような内容でしょうか

山本氏 まず日本人ほど社会に出て勉強しない国民はいないと言っているくらい、本当に勉強しません。日本は18歳のときの受験で成功したか否かが一生を左右するような、残念ながら「超学歴社会」です。でも18歳の一度の受験がその人の能力とは限らないですね。有名大学を卒業していなくても、または大学を卒業していなくても、その後一生懸命に学んでいる人、勉強している人が、有名大学を出てから一切勉強しなかった人と同じわけはありません。そういう意味では、皮肉なことに東京大学エクステンションは、東京大学という名称を含みながら、学歴社会から「学習歴社会」に変えていこうとしているんです。学歴社会ではないものを作るために、東京大学というブランドを使っています。私が学生のときは生成AIやゲノム編集、量子コンピューターなどはなかったけれど、今は当たり前で学生の皆さんが学んでいますよね。そうしたことを社会人も勉強していかないと、ついていけないくらい仕事も変わってきています。そう考えたとき、社会人の学び直しをしっかりと進めていかないと、看板のおかげでイメージは良いとされる企業でも、中身が古かったら、もう世の中にキャッチアップできない。それを追いつくように実現して



東京大学TLO社長として国際会議「Licensing Executives Society International」に出席＝米国シカゴにて

いくのが東京大学エクステンションです。

——どのような学びを経験できるのでしょうか

山本氏 実際にはデータサイエンスやAIの学修などいろいろなことに取り組んでいます。「スマートシテスクール」※という教育プログラムでは、過疎化が進み、消滅可能性自治体と指摘されながらも、DX（デジタルトランスフォーメーション）を積極的に推進して危機を脱した北海道の上士幌町^{かみしほろ}を実際に訪ねるなど、各地の実情を見たり聞いたりして学んでいます。東京23区と同じくらいの面積に人口5000人弱という上士幌町は、町中を無人バスが走り、宅配はドローンで飛んで来て、バイオマスや再生エネルギーの活用でエネルギー自給率は100%などと、今では持続可能なモデル都市となりました。教育というと、先生が黒板に書いたことを学ぶイメージかもしれませんが、それよりもずっと実践的で、仕事に生かせるような学びを行っています。DXやAIなどのイノベーションの進展では、なんとなく世の中が変化していると感じるかもしれないけれど、必ず仕掛け人がいるんですよ。誰が何をどう仕掛けるかも大事でしょう。さまざまな地域を見ながら研究を進めているというのが実態です。

※スマートシテスクール：都市の課題を読み解き、データ活用と新技術の社会実装を通じて課題解決と価値創造を担うスマートシティの実現や都市・地域のDXの担い手の育成を目指す、若手から中堅の社会人を対象とした教育プログラム。（東大大学院新領域創成科学研究科ホームページより）



《人口爆発や食糧危機、環境破壊…。子や孫や、その先の世代は地球に住めなくなるかもしれない。山本氏は、そう警鐘を鳴らす一冊の本に衝撃を受けた。技術の開発や技術移転を通じて、そうした事態を招かないような未来を形作ることに貢献する。そう願って、仕事に向き合っている》

技術移転「明日の社会、未来の地球のために」

——仕事の転機、人生の転機と振り返るようなことはありましたか

山本氏 先ほどお話ししたリクルートブックを担当していた課長職のとき、経済学部で斎藤先生の話を知った。先生は「経済学者でありながら環境問題などを軽視しすぎていた」と述べられました。お話の中で、環境学者でマサチューセッツ工科大学（MIT）のデニス・メドウズ氏と妻らの共著「成長の限界（原題：The Limits to Growth）」（1972年）という本の存在を知りました。世界が一つの国だとして、そのGDP（国内総生産）はいつまで伸びるかをMITのスーパーコンピュータでシミュレートするのですが、2030年頃に急降下するという内容です。理由として人口爆発や食糧危機、天然資源の枯渇、フロンガスによる大

気圏の破壊などいろいろ挙げられていて、メドウズ氏らは学者仲間から「人間は賢いから、人口爆発が起きる前に子供を数多くは作らなくなる。大気圏に悪さをするようなフロン開発はただちにやめるだろう」などと、随分と批判を受けたそうです。メドウズ氏はのちに「限界を超えて（原題：Beyond the Limits）」という本も書いて、人口爆発やフロン対策をしたとしても、それでも2050年頃に限界は来ると発表しました。要は、私たちの子供、孫たち、今生まれていない世代は、地球に住めなくなるかもしれないという警鐘です。斎藤先生は「経済学者は環境について、あまり考えないできた」ともおっしゃっていましたが、私は頭を殴られたくらいの衝撃を受けて、すぐに「限界を超えて」を読みました。本の結びに10項目くらい解決策が示されていたのですが、その中で唯一、私に刺さった言葉が「技術移転」だったのです。「良い技術があったら、それを適材、適所に役立てなさい」という内容で、それからはもうリクルートブックではなく、新規事業の技術移転の世界へと向かいました。

だから、それくらい私たちが取り組んでいる技術移転は、



山本貴史氏

やまもと・たかふみ。1962年岡山県新見市生まれ。1985年中央大学経済学部産業経済学科（現経済情報システム学科）卒。同年リクルート社入社。2000年株式会社先端科学技術インキュベーションセンター（現東京大学TLO）社長（2023年退任）。産学間の技術仲介ビジネスを日本国内で構築、展開したパイオニアで、のちのTLO業界発展の嚆矢となった。現職は次のとおり。株式会社理研イノベーション代表取締役社長、東京大学エクステンション株式会社代表取締役社長、国立研究開発法人理化学研究所副理事。

明日の地球のため、明日の社会のために大事だと思っているんです。もしかすると、もう技術は限界まで発達していると皆が思っているかもしれない。でも、私はまだまだ新しい技術を開発できる余地があると思っています。皆が明日、携帯もインターネットも全部捨てて江戸時代に戻るか、もう少しあらうか。それでいうと、私はいい意味で、もっと発展できる世界があるという方に懸けていきたい。そうした転機を示していただいたのも斎藤先生だし、中央大学という学びの場だったと思います。

価値観やコンテキストの異なる人と交流 質実剛健の校風、胸を張って頑張ろう

—— ご多忙な日々を過ごされる中で、母校・中央大学のことを意識することはありますか

山本氏 駅伝はもちろん応援していますし、意識することはたくさんありますよ。いつも応援しています。私は、数少ないケースかもしれないけれど、学生のときに学んだことがそのまま仕事になっています。技術移転だけではなく、当時はアントレプレナーという言葉は広まっていなかったけれど、先生の教えに導かれて、自分の人格が形成されたというか、結局アントレプレナーのようになったんだと

思っています。誰が学生の自分に影響を与えてくれたかは、（卒業して）10年後に振り返ってわかるようなことかもしれないけれどね。大学で学ぶということはとても大事な経験だと思っています。学生や大学の活動に関しては、できる限り応援していきたいと思っています。

—— 学習歴が重要視される社会への移行を目指す中で、学生のうちに積むべき経験はあるでしょうか

山本氏 できれば海外に行って、価値観やコンテキスト（さまざまな背景や事情）の異なる人と交流してほしい。海外に数多く足を運ぶといいと思いますよ。日本人はコンテキストが似ているんです。「中学校の修学旅行で枕投げをした」という話をすると、中学校も出身地も違うのに、皆が何となく雰囲気や光景を想像できてしまう。生活スタイルも結構、似ています。ところが、海外の人は「修学旅行で枕投げって何?」、「What is it? Why did you want to throw pillows?」と、訳がわからない話になってしまうから（笑）。要するに価値観やコンテキストが全然違う人たちと話をすることで、もしかすると自分の中で常識だと思っていることを疑うようになるかもしれないし、新しい自分の価値観の軸のようなものができるかもしれない。私は世界中に友達がいます。いろいろな人と、ただ酒を飲んで一緒に笑って過ごすというよりは、意見交換もしますし、割と突っ込んだ話もします。本気で、生身で付き合っていると言っているのかな。そういう姿勢でやっていくと、いいと思いますよ。

—— 後輩の中大生たちにエール、メッセージをお願いします

山本氏 中央大学は華やかではなく、地味な校風なのかな…（笑）。それぞれの道で一生懸命に頑張してほしいと思います。質実剛健、まじめな校風だと思いますので、学生の皆さんも卒業した皆さんも、誇りをもって胸を張って頑張ればいいのではないのでしょうか。



山本貴史社長（前列中央）を囲んで、学生記者と撮影担当の放送研究会のメンバーたち＝埼玉県和光市の理研イノベーションで